Self-therapy for donor conceived.

自己セラピーの方法:
ドナーからの出生者

Mr.David Berry

Q. 自己紹介をお願いします。

ニューヨークのローチェスターで育った。そこには、イタリア系住民の大規模なコミュニティがある。大学で学ぶたにフロリダに移り、それ以来そこに住んでいる。3 年前に結婚し、現在、生後 9 か月の息子がいる。デジタルメーキングエージェンシーを経営している。自由時間には、自転車に乗ったりボクシングを楽しんだりしている。

数年前、義理の兄の家族と一緒にクリスマスディナーをしていた。義理の兄は、イタリアの祖先をとても誇りに思っていた友人についての話をしてくれて、それが印象に残った。（その友人は入れ墨もしていたらしい）。この友人は、DNA 検査を受けて、実際にはアイルランド人の祖先を持つことを偶然発見した。

この話を聞いて、自分の祖先について考えるようになった。父方の祖父は、父が 7 歳のときに亡くなった。だから、祖父についてほとんど知らない。父方の祖先についてもっと知りたいと思ったので、すぐに DNA 検査キットを注文した。数ヶ月後に結果をチェックしたとき、自分がまったくもってイタリア人ではなかったことに驚愕した。これをきっかけに、自分はドナーから生まれたことを徐々に知ることになった。

Q. いつ・どのようにそのことを発見しましたか?　その時の気持ちは?

精子提供で生まれたことに気づくのにかなり長い時間がかかってしまった。今から振り返って考えてみると、それは少しバカバカしい。しかし、父親の系譜については多少なりとも疑問があった。DNA 検査の結果を知ったとき、最初は別の説明を考えていた。そして、真実を本当に理解するのに半年もかかった。最初、両親のどちらかにユダヤ人の血が混じっている可能性があると考えていた。しかし、DNA 検査で近親者を発見したとき、そうではないことに気づいた。また、叔父の一人が軍隊にいる間に精子を提供したのではないかと考えたりもしたが、この理屈も誤りだとわかった。

早い段階で自分が発見したことについて両親と話し合った。当時、家族の秘密を暴いたとは思っていなかった。両親は、自分がドナーから生まれたことを知っていたが、知らない振りをし、真実を明らかにしようとしなかった。

自分と同じ頃に生まれた人物と DNA が一致していることを見つけたとき、両親は最終的に真実を認めた。33 歳の誕生日の直前のことだった。そのときかなり感情が揺さぶられた。出生の真実を認めるのは難しいことだった。特に、実の妹が実際には半きょうだい（ドナーが異なる）だとわかったのはショックだった。それでも、自分のことをちゃんと愛してくれている両親には感謝している。

発見してから 1 年間、家族に亀裂は生じなかった。両親はそれを家族の他のメンバーに秘密にしておきたいと思っていたが、自分はそれを永久に秘密にするようなことはできなかった。そして、それを隠すように頼まれるのは不当だと感じた。道を見つけるまで突き進んだが、その間ずっとフラストレーションを感じていた。

半きょうだいの中には、片方の親しか生きていないため、両親に自分の出生について尋ねることができない人もいる。里親として育てられた人もいる。それに比べれば、自分は両方の親と自分の状況について話し合うことができてよかったと思っている。

Q. 自分がドナーから生まれたということは、全く想像もしないことでしたか? それとも、子供の頃から、家族の中に違和感はありましたか? 父親に似ていない、と感じたことはありましたか?

知る前と比較したことはなかったが、真実を発見したあと、それはすべて理にかなっているように思えた。父親とはまったく似ていない。自分は社交的で外向的だが、父親は控えめで静かな性格。父親は困難な子供時代を過ごしたので、これが彼の性格に影響を与えた可能性があると思う。

自分は母親に似ている。外見は父親にまったく似ていない。妹のサラは父親に似ている。これは、若いときからずっとそう思ってきた。

Q. ブログの目的は? どのような人からコンタクトがありましたか?

これまで、ブログを介して 10 人くらいの人と連絡を取りあった。そういう人にいつも手を差し伸べて、彼らの弱さを受け入れる能力があるわけではなかった。自分の経験が誰かの共感を呼んでいることはありがたいが、すべての人と個別に関わるのは難しかった。

自分の経験について書くことは、自分にとってセラピーのようなものだった。頭の中にごちゃごちゃした考えがあり、それを書き出して初めて意味になることがよくあった。ブログは、自分の考えを論理的に整理して理解するのに役立った。

Q. 両親に対して、どのような気持ちですか? 現在、どのような関係ですか?

自分は母親と仲がいい。両親に対して同じ愛情を持っているが、性格は母親に似ていると思う。

秘密にしておくという両親の選択について、当時は、今とはまったく時代背景が異なっていて、両親は DNA 検査が将来、そのように普及するとは思っていなかったのだろう。また、父方の家族とは仲が悪く、近くに住んでいなかった。父親は複雑な家庭環境の中で育っている。そういうこともあって、両親は、適切な時期ではないと感じ、話すのを先延ばしにしていたのだろうと思う。

もし自分だったら、もっと違う選択をしていただろうと思うが、両親がしたことを理解はできる。

Q. 父親はイタリア系、ドナーはユダヤ系とのことですが、それを知ったとき、大きなアイデンティティ・クライシスになりましたか?

父方の家族と親しい関係を持たないことの利点の 1 つは、彼らとの関係を「失う」ことはないし、彼らに会う必要性から解放されていることだ。自分はアイデンティティの危機を経験しなかった。しかし、新しいアイデンティティが意味する事柄と格闘した。それは、自分がどこから来たかとは関係がなく、自分がどのようにしてここにたどり着いたのかということと関係していた。自分の祖先についての謎が絡み合って自分の前に続いていた。

Q. イタリア系だと思っていたとき、自分のアイデンティティの中に、イタリア系であるということはどのように位置づけられていましたか?

イタリアとのつながりは個人的なアイデンティティの中で主要な部分ではなかった。自分はローチェスター出身で、そこには大規模なイタリア人コミュニティがあるので、イタリアの要素を部分的に受け入れていた。例えば、学校でイタリア語を進んで勉強したりしていたが、それは自己意識の中心ではなかった。

ドナーから生まれた事実を発見する前と後に、イタリアに旅行した。自分がイタリア系ではないということがわかっても、特に旅行の経験に影響はなかった。知る前と後で特に違いはなかった。

Q. 現在、遺伝的父親がユダヤ系だとわかりました。ユダヤ系というアイデンティティは自分の中にどのように位置づけられていますか?

このことは、とても興味深かった。ユダヤ人とのつながりには神聖なものを感じている。今の妻にプロポーズしようとしていた頃に、この事実を知った。自分の妻は養子縁組されていて、ユダヤ人の家庭で育った。自分が一部ユダヤ人であることを知ったので、妻の家族と一緒のテーブルにつけると感じている。息子が生まれたとき、再度、この意識を新たにした。自分と妻は敬虔なユダヤ人ではないが、ユダヤ人の主要な休日を祝うなどして、ユダヤ人の信仰で息子を育てている。

自分は詐欺症候群(imposter syndrome)ではないかと感じている。自分の一部はユダヤ人だが、必ずしもユダヤ人のストーリーに対する権利があると感じているわけではない。たとえば、ホロコースト生還者の経験と同一視することに抵抗がある。というのは、自分はユダヤ人のアイデンティティに突然出くわしたように感じていて、自分はその一部であると主張する権利がないように感じているから。

Q. 精子ドナーに対して、どのような気持ちですか?

精子ドナーは母親の主治医だった。この事実について強い疑念を抱いている。不妊治療中に医師の精子を使用することに同意した女性はいなかった。それなのに、現時点で、少なくとも 10 人のドナーきょうだいを発見している。1 年くらい前にドナーと電話で話した。最初、ドナーの娘とコンタクトを取り、彼女は協力的で、DNA 検査を受けることに同意してくれた。結果を待っている間、検査の結果で自分の身元が確認されたら、ドナーは連絡を拒否する可能性が高いと考えたので、その前に直接連絡することにした。医師に、自分が父親になる前に、自分のユダヤ人の伝統について学びたいとメールを送った。30 分後、医師から電話がかかってきた。彼は、自分の家族と起源について多くのことを話した。デビッドは自分の出生について直接彼に聞いた。医師はそれを否定しなかった。それは友好的な会話だったが、その医師と二度と話したいと思わない。もし、医師とまた話をする機会があるとすれば、自分の精子を使って患者を妊娠させた彼の動機を知りたい。電話での会話からは、おそらくエゴイズムが動機だったと思う。しかし、一部はユダヤ人の伝統に対する医師の情熱もあったと思う。不妊に苦しんでいる家族を「助けたい」という気持ちもあっただろう。といっても、それは彼の心の底からのものではなく、自分自身のエゴから、あくまで治療の結果を得ることがゴールだったのだろうと思う。ドナーが誰かを知ることは、すべてを解決してくれると信じていたのに。母親は、自分が同意していないのに、自分の精子を

使用した医師に対して複雑な感情を抱いている。それを受け入れるのが難しい。総じて、彼女は問題ないと言っているが。それについて話すことで徐々に慣れてきたようだ。父親はそれについてあまり話さないが、母親と同じように感じていると思う。

Q. ドナーきょうだいは何人いますか?　その人たちとの関係は? ドナーきょうだいが増えることは嬉しいですか? それともフラストレーションを感じますか?

10 人いるドナーきょうだいたちのほとんどと話をし、最初に出会った 2 人とは特に親しい関係を持っている。残りのきょうだいたちとも友好的に付き合っているが、最初に出会った半兄弟と半姉妹とは、お互いを発見した後すぐ、とても親密になった。しかし、後でもっとたくさんの半きょうだいがいることがわかり、驚いた。

　ドナーきょうだいの中には、少々アグレッシブな人もいて、あとから　輪の中に加わったことで、自分が取り残されている、パーティーに遅れてきたかのように感じている人もいるようだ。ドナーきょうだいとの関係には全面的に感謝している。

　今は、もっと多くの半きょうだいを発見することは、嬉しいことではなく、フラストレーションを感じる。世界中にきょうだいがいて、全然知らない他人に親密さを感じることは難しい。ドナーきょうだいが増えるということは、それらの人々に対して、ドナーから生まれた事実を初めて告げることになる。それは大きな責任を伴う。

Q. ドナーから生まれたことによって gift はありましたか?

自分と何人かのドナーきょうだいは、社会的にみて、業績を積んでいる。自分の遺伝子が最初に考えていたものとは違うことがわかったので、アイデンティティはより複雑になった。両親は大学に通っておらず、高校を卒業しているが、自分は修士号を取得している。今では、このような知的資質は、自分の勤勉さだけでなく、自分の(ドナーから受け継いだ)遺伝的構成に部分的に起因していると感じている。

　反対に、自分は背が低く、ひざが悪く、19 歳の頃から髪が薄い。これらの特徴も遺伝的にドナーから引き継いだものだと思う。

Q. 自分のアイデンティティの中で、ドナーから生まれた事実はどのくらいの比重を占めますか?

ドナーから生まれた事実は大きい。これはめずらしいことなので、自分の会話の大きな要素になっている。それにもかかわらず、家族や親しい友人に囲まれているとき、自分は以前と何ら変わらないと感じていて、それは嬉しいことだ。

　ドナーから生まれたことがわかって、ドナーきょうだいとの関わりを通して、いろいろな可能性に出会った。例えば、ドナーきょうだいの多くは、高い成果を上げ、社会的に立派だ。これを「きみならどうする？」というタイトルの本と比較する。これは、異なる環境のもとで育てられた人についての洞察を与えてくれる。それは、ハードワークをすれば達成できることを教えてくれる。謎と好奇心を持ってこれに取り組んでいる。

Q. ドナーからの出生者にとって、子供の福祉や権利とは、何でしょうか? 禁止すべきですか?　それとも子供が小さい頃からテリングすれば、問題ないでしょうか?

自分の場合は、意図せずDC活動に関与するようになった。ドナーによる出生者たちの世界は小さく、互いに強く結びついている。DCに関する詐欺を防ぐため、不妊治療に関する法律を可決させることを目的に、ワシントンにあるRight To Knowという非営利団体の仕事を手伝ったことがある。自分の動機は、自分に起こったこと—すなわち、自分の精子を使用する医師—は違法であるべきだと考えている。一部の州では、人々は医療記録や病歴を請求する権利を持っていない。不妊治療を受けた女性患者は、非倫理的な行為をする医師に対抗する手段がない。

ドナーきょうだいのひとりの女性は、9年間、精子ドナーとなった医師の患者だった。それは、彼女がその医師が自分のドナーだと知る前のこと。彼女が自分の生物学的娘であることを知っていたにもかかわらず、その医師は彼女を治療し続けていた。医師は自分の行動に責任を持つべきだ。

きちんとした規制があれば、DCは家族を作るための貴重な方法であると思う。多くの場合、ドナーの医療記録や身元調査を行っていないので、システムをより良くするために、透明性と真実（そして定期的な健康チェック）がもっと必要だと思う。これらの措置が講じられれば、DCを支持する。IVFは依然として高価な治療で、患者にとって法外な費用負担がかかる。

Q. これからDCで子供を作ろうとする親に対して、どのようなことを伝えたいですか?

何よりもまず、真実を語って欲しい。今では、真実を知らせるための方法についていろいろなリソースがある。いずれにしても、早い段階で知らせることで、それは子供の物語の一部になる。親自身の恐れや不安を子供に投影しないで欲しい。子供が自分自身のことに興味を持つのは普通であるということ、他の子と違っていても、何の問題もないことを子供に知らせて欲しい。

自分の両親は、真実の価値と真実に対する子供の権利に苦しんでいた。子供は財産ではなく、人間だ。子供たちは成長して、自分で考え、呼吸し、自分の感情を持つようになる。誰もが自分自身についての真実に値する。

また、親が子供にとって善いことを行っている限り、半きょうだいの発見が両親から居場所を奪ったり、子供との関係を台無しにするようなことは決してないということを保証する。

Q. 伝統的な核家族（父親と母親、遺伝的に繋がった子供）が、子供にとって最も理想的だといえますか?

理想的な家族について、自分はもっともっと広い視野を持っている。ある友人に自分が精子提供から生まれたことを告げとき、その友人は冗談めかして「私の本当の父は役立たずのクズなので、自分の父が精子提供者だったらいいのに」と言ったことを思い出す。これには心を動かされた。自分が父親を持っていることがどれほど幸運であるかを思い知った。

伝統的な家族がより多様な選択肢よりも子供を育てる能力が優れているという保証はない。子供は家族から安定と愛を得るのに値する存在だが、それは家族の形態とは無関係。

Q. いくつかの国では、出自を知る権利が認められ、成人したらドナーの情報にアクセスできるように法律が制定されています。成人するまでドナーを知ることができないことは、子供にどのような影響を与えると思いますか?

自分は経験がないので、その立場からコメントすることはできないが、年齢制限はおそらく子供にかなり大きな影響を与えるのではないかと思う。自分はそれに取り組む必要がなかったのはよかった。子供たちに情報を提供することが、子供の最善の利益だと思う。

Q. その他、コメント。

過去に DC についていくつかのインタビューを受けた。1 つはマイアミの地元のニュースプログラム（ドナーを発見する前）、もう 1 つは 10 代の女の子たちの高校のプロジェクトのため、そして最後の 1 つは、つい 1 週間前フランスに拠点を置く非営利団体から。研究者からのインタビューは今回が初めて。

現在、約 8 か月間、ブログを更新していない。自分自身の癒しの観点から必要なものを書いてきたが、今後も記事を書いてゆきたい。

(2022 年 3 月)

David Berry

イタリア系の住民の大規模コミュニティがある、ニューヨーク州ローチェスターで育った。DNA 検査で、自分の祖先がイタリア系ではなく、ユダヤ系だとわかる。ドナーは母親の主治医だった。自分の気持ちを整理するため、ブログを書いている。

The Berry Chronicles（ブログ） Link

ドナーきょうだいの一人（同じコミュニティで育った） Link

My Middle School Classmate is my Brother Link